



213号

2016 / 5 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp
◆「わんりい」HPのアドレスが上記になりました。



「盛装した苗族の女性」2010年5月 貴州省凱里雷山県にて 馮学敏(中国写真家協会会員・日本写真家協会会員・世界華人写真家連盟副会長)

大切な客を村に迎えるので盛装し、牛の角で作られた酒杯を持って村の入り口で客を待つ貴州省雷山郎徳上寨の女性たち

今年の春は難産でしたね。やっと今頃になって、遅い春を感じていますが、植物はずっと前から季節を正しく感じて、準備をしていたのでしょう。あちこちの植物園から、牡丹のお花見のお誘いが広告されるようになりました。

牡丹は中国西北部が原産地で、古くからその根が漢方薬として重用されていました。しかし、牡丹の花が詩歌に登場するのはずっと遅く、盛唐の詩人李白が楊貴妃の美しさを牡丹の花になぞらえたり（「清平調詞」其の二）、晩唐の詩人・白居易が、都の人々が牡丹をめぐる様子を歌ったり（「牡丹芳」）、長恨歌でも楊貴妃を牡丹の花にたとえたりする頃からです。不思議なことに、唐以前、六朝時代や漢・周の時代には、牡丹の花が文芸作品にとりあげられたことはないのです。根が生薬として珍重された牡丹ですが、花の消息は晩唐まで不明でした。これが、牡丹の花の謎です。

「牡丹」の「牡」はオス、根を意味し、「丹」は赤いと言う意味です。根が赤く、その皮が漢方薬として多用され、2世紀ごろから栽培されていました。しかし、唐代の中心地・長安の付近では採れず、手に入りにくかったので、民間では、長安付近にも自生する「ノボタン」の根を「牡丹」の根の代用としていましたが、花にはあまり注目しませんでした。

ご存知のように長安は国際的な都市で、異国情緒に溢れ、西の方からはササン朝ペルシャの園芸文化が入って来ました。当時ペルシャで好まれたバラの一種も、宮廷に入りましたが、このバラは、大きなピンク系の花びら、中心に黄色いおしべがくっきりとして、「ノボタン」の特徴に似ていました。ペルシャのバラに似た「ノボタン」の突然変異種に改良が加えられて、外来のバラをしのぐ美しい園芸種の牡丹が出来上がりました。しかしそれは宮廷の中だけで、一般市民の目には触れませんでした。

ところが、安祿山の乱で宮殿が破壊され、庭園が踏み荒らされて、宮廷内に限定されていた文物が市中に持ち出され、中でも美しい牡丹の花は人々を虜

にし、牡丹の花見や、苗木の売買なども行われるようになったのでした。ここで初めて、花を觀賞し、根を生薬として利用する牡丹が誕生しました。当然、六朝時代から生薬のリストに掲載されている「牡丹」とは全く別物だそうです。因みに、六朝時代に「牡丹」と言われていた植物は、今では「百両金」と呼ばれているもののようで、牡丹とはすっかり別物になっていますが、根が赤い特徴は「牡丹」そのものです。当然ながら、薬効も古い文献の「牡丹」と同じです。ここに、牡丹の名前の乗っ取りが完成したのでした。

以上は、中国で「名物学」という、物の名前の時代的変遷や、地域による違いなどを研究しておられる方が、ネットで紹介してくださったお話です。（人民網日本語版）

今でも中国の方々は牡丹の花が好きで、公園や大学の構内には、必ずと言って良いほど、牡丹を植えた一角があり、季節ともなると、遠くからも人々が訪れて、花見を楽しみます。中国の人々にとっての牡丹は、丁度、日本人にとっての桜に当たる花かも知れませんね。

北京市海淀区内に牡丹園という地名があり、地下鉄10号線が通っています。以前はバスでよく通ったので、牡丹園というからには、きっと大きな牡丹園があるのだろう、一度行ってみたいと地図上で牡丹園を探したのですが見当たりません。北京の友人に聞くと、そんなものはもう無いと言われてしまいました。これと同じことを、北京の日本大使館へ赴任した友人も経験しました。彼の場合は、地下鉄1号線の西の終点・苹果園駅を見つけて、果樹園のあるのどかな田園を想像して1号線に乗って出かけた。終点まで行って駅を出てみると、田園とは程遠いごみごみとした街並みが続いていたので、びっくりするやら、がっかりするやらで、すげすげと帰ってきたそうです。

考えてみれば、変化という意味では、物の名前よりも、地名の方が、名前と実情との食い違いが起こり易いかもしれませんね。

Jūn zǐ zhī dé fēng
君子之徳風

(君子の徳は風なり) 〈学顔淵第十二〉

うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

孔子は魯の国で昭公、定公という二代の君主に仕えましたが、兩人ともすでに実権を失い、現に国政を牛耳っていたのは孟孫氏、叔孫氏、季孫氏という三家の貴族でした。中でも最も強い勢力を誇っていたのは季孫氏で、この季孫氏一族の当主が季康子です。

貴族が実権を握って君主をないがしろにするということは、孔子の政治理念からすると、最も許しがたいことでした。この三家を排除し、国政を本来の姿に戻すことを、孔子は何度か試みましたが、なかなかうまくいきません。そこで、最も強い権力を握っている季康子に直接自省を促すことで、国政改革の実を挙げようとした。一方、季康子は、内外に人望の厚い孔子を味方に引き入れることで、貴族間での優位性を保とうと、もくろんでいました。

そういう関係の中で交わされたのが次の対話です。

ある時、季康子が政治のやり方について孔子に問いかけました。「如杀无道，以就有道，何如？(Rú shā wú dào, yǐ jiù yǒu dào, hé rú?)」(如し無道を殺して、以て有道に就けば、何如ん)〈顔淵第十二〉。道義にそむく者を殺して、道義に厚いものだけを味方に付けたら、どうだろう、と。道義にそむく者を殺すとは、現代の常識から考えると、ずいぶん荒っぽい議論のようですが、戦乱の世を終わらせるための非常手段としては、誰しもが考えそうなことです。ましてや当時の権力者にとっては、常識として立派に通用する議論であったことと思われます。事あるごとに道義を振りかざす孔子を前にした季康子の、得意げな顔が目浮かぶようです。しかし孔子の答えはこうでした。

「子为政，焉用杀？ 子欲善，而民善矣 (Zi wéi zhèng, yān yòng shā? Zi yù shàn, ér mǐn shàn

yǐ)」(子政を為すに、焉んぞ殺を用いん。子善を欲すれば、民善ならん)。閣下が政をなさる上で、どうして人を殺す必要がありますでしょう。閣下が善人であることをお望みなら、民もそれを見倣って善人となることでしょう。

季氏一族の専横ぶりは、当時、誰の目にも明らかでした。いわば乱世の張本人とも言うべき季康子が、「無道を殺して、有道に就く」などと嘯くのは、孔子からすれば笑止の沙汰であったはずですが、しかしそのことはおくびにも出しません。人を殺す前に、権力者の貴殿こそが率先して善人となるべきですよ、そうすれば民も善人になりますよと、正論から攻めます。そして次のように締めくくります。

「君子之徳風。小人之徳草。草尚之風，必偃。(Jūn zǐ zhī dé fēng, Xiǎo rén zhī dé cǎo. Cǎo shàng zhī fēng, bì yǎn)」(君子の徳は風なり、小人の徳は草なり。草之に風を尚うれば、必ず偃す)。君子の徳は風のようなものです。小人の徳は草のようなものです。草に風が加われば、必ず靡きますよ、と。この場合の「君子」とは一国の指導者を指します。そして「小人」とは一般民衆を指します。

政治の目的は、民を幸せにすること。人を殺す政治などあり得ない。これが孔子の主張の基本でした。そしてこれを実現できる最低条件は、指導者が善人であるかどうかにかかっているということです。

さてこの忠言を季康子が理解できたかどうか。その後の推移を見ると、否と言わざるを得ません。しかし孔子の教えを後世に伝える上で、季康子は少なくとも一定の役割を果たしたとは言えるでしょう。

(わりりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

昔、南宋の時代、汴梁（今の河南省開封）に李認という役人がいました。古里は陳州（河南省淮陽）ですが、いろいろな地方で、知事や、判官などの役職を歴任しました。或る年、また家族を残し、二人の下人を連れて杭州へ単身赴任しました。

李認には妻の韓、息子の李元がいます。李元は年齢が18才前後で、科挙の試験を何回か受けたことがありましたが、及第しませんでした。家柄の良いこの青年は、勉強にはあまり熱心でなく、美しい自然の中に身を置いている方が好みでした。

李認は杭州に赴任し、たちまち一年が過ぎました。ある日突然息子のことを思い出し「あの子の近頃の勉強の具合はどうだろうか」と気になりました。それで家族に便りを書き、王安という下人を古里にやり、家族の様子を見させるついでに息子の李元を杭州に連れて来るように命じました。

王安は船に乗り、時には馬車を飛ばして、夜を日に継ぎ、ほどなく陳州の李宅に着きました。王安は李夫人に挨拶をすると、主人の手紙を渡しました。李夫人は、書院から息子の李元を呼んで来て父親の手紙を読ませ、李認が息子を杭州に呼び寄せたがっていることを知りました。また、李元は家を出てまだ訪ねた事のない美しい景色を楽しむことができる機会になると考えて、内心嬉しくてたまりませんでした。早速、琴、剣、書物など旅に必要な荷物を纏め、旅の準備を始めました。

二、三日後、母に暇を告げると王安とともに杭州に向かって出立しました。王安が陳州に向

かったときと同様に船に乗り、馬車を雇って旅を続け、間もなく揚子江へ着きました。

李元は雄大な山河の風景を眺めて深い感銘を受け見飽きることがない様子でした。そしてその気持ちを一篇の詩に書きました。

西出昆仑東到海
驚濤拍岸浪掀天。
月明滿耳風雷吼，
一派江聲送客船。

西の方、崑崙より東に流れて海に至り
岸打つ浪の音は天を驚かせる。
月明かりの中、風が唸り雷が轟き
川浪の響が客船を送る。

その後、揚子江を渡り、鎮江、蘇州、呉江など各地各様の美しい風景に感動しつつ父親のいる杭州を目指しました。

その又途中、呉江のあたりの風景に強く感銘を受け、船頭に船を止めさせ岸に上がって少し歩いてみることにしました。岸の近くもの静かなたたずまいのお社があるのを発見し中に入って見ました。歴史上で名を成した人物の像が祀られていて、李元は更に感銘し、お社の番人から筆と墨を借りて壁に詩を書き残しました。

お社を出ると、目の前で何人かの子どもたちが竿で何かをつついて楽しそうに遊んでいます。近寄って覗いて見ますと、なんと、金色の目をした赤い子蛇がこどもの竿で叩かれ、血まみれで息絶え絶えになっています。金色の目をした赤い蛇を李元はこれまで見たことがありません。

珍しい蛇だと思うと共に可哀相にも思い、子どもたちを引き止めて

「子どもたちよ、小さな命を虐めてはならない

よ。私が銅銭百文をやるから子蛇をいじめるのを止めて私に売ってくれないか」

と言うと、子どもたちは大喜びで子蛇を放しました。

李元は子蛇をそっと袖に入れ船に戻ると、王安を呼んでヨモギを取り出し煎じるように命じました。そして子蛇の血を洗い落としやり、ヨモギを煎じた液を傷だらけになった子蛇の身体に塗ってやりました。

そして子蛇の容態が大丈夫だと確認すると、船頭に船を出させ、そこから離れた岸辺の、草木が茂り、訪れる人がいないようなひっそりとしたところで子蛇を放してやりました。子蛇はじっと李元を見ました。

そんな子蛇に李元は次のように語りかけました。

「折角君を逃してやったのだ。人目に付かないところへ隠れるのが良い。二度と人に見つかるてはならないぞ」

李元の手を離れた子蛇は湖に向かって行き、泳ぎ出すと間もなく水中へ潜り姿が見えなくなりました。

李元は船を返させ、杭州を目指して進みました。

早くも3日間で杭州に着き、父の李懿に会い、母のことや古里のこと、色々と報告しました。李懿からも日頃の勉強の様子について詳しく聞かれ、李元はできるだけ李懿を満足させるよう気をつけて答えました。

李元はしばらく杭州に滞在した後、そろそろ帰った方が良いと思い、李懿に言いました。

「私がない間、母上様は一人で家にいて寂しいことと思います。また春の試験もそろそろ近づいてまいりますので、私は古里に帰るべきだと思いますが」

李懿も「その通りだ」と息子に同意し、妻への土産を買って、李元を陳州へ戻らせることにしました。来た時と同様、王安が李元を送って行くことになり、纏めた荷物を船に運び入れると陳州に向かって帰路につきました。

帰路は来た時と同じ道なので、もう一度各所の美しい景色を楽しむことができると思い、李元の気持はわくわくしていました。

船に乗って呉江に着いた頃は丁度日暮れ時

でした。李元は前に訪ねたお社の近くで船を止めさせました。

「今晚はここで一晚、船の中で休むことにしよう。私はその前に岸辺に上がってちょっと散歩して来よう」

と言って、一人で陸へ上がりました。

ゆっくり歩いていると、「垂虹亭」と書いた扁額を掲げている小高い亭の前に出ました。李元は亭に上がり、欄干にもたれながら周囲の景色を眺めてみました。夕日の中、遥かにたゆたう湖の光り、おぼろに霞む山の色、雁の群れが飛び交い、亭の周りは穏やかな田園風景が広がっていました。

(続く)



満柏 画

見掛け倒し

私の調べた諺・慣用句 49

三澤 統

世間には、堂々とした容貌をもち、身なりもきちんとしていて隙がなく、物腰は悠揚迫らぬ態度で、一見人品卑しからぬ様子なのですが、いざ良く知ってみると、物の考え方は稚拙で、話す内容も脈略がなくてがっかりしてしまうような人物が居るものです。

昔の中国にもそのような見掛け倒しの人が居りました。今回はその物語です。

辞書にはそれぞれ次のように

載っています。

▲ 小学館 デジタル大辞泉：

「見掛け倒し 外見はすぐれているが、実質は劣っていること。また、そのさま。」

▲ 小学館 中日辞典：

「华而不实 huáérbùshí花が開くだけで実を結ばない；見かけは立派だが内容がない。見かけ倒し。」

このお話の出典は「左伝注・文公五年」です。

春秋時代の晋国の大夫(官職名)の陽処父は、使節として魏国へ行き、帰りにねいゆう 宁邑を通り、一軒の旅館に宿泊しました。宿の主人であるよう 嬴は陽処父の堂々たる容貌、品格ある振舞いを見てすっかり感服して、妻にこっそりと言いました。「私は前からこれぞと思える優れた人物に出会えたら師事したいと思い、何年間もずっと心に留めていたのだが、そのような人物にはずっと巡り合えなかった。でも、今日陽処父という人物の形なりと振りふを見て、私は彼に師事することに決心したよ。」

嬴は陽処父の同意を得て、妻子に別れを告げ、

彼と一緒に出発しました。ところが、道々陽処父が嬴に話す内容は、出まかせで筋が通らず、彼が何を伝えたいと思っているのかさえさっぱり分かりませんでした。

嬴は歩きながら陽処父の話を聞いていましたが、丁度宁邑の県境まで来たあたりで、この人について行くのは止めた方が良いと心を決め、陽処父と別れて家へ戻ることにしました。

嬴の妻は夫が突然引き返して来たので、驚いて夫に尋ねました。

「あなたはやっとのことで求める人に逢えたのに、どうして彼と一緒にいかないのですか、あなたは固く決心したのではなかったですか？ 家の

ことなら何も心配しなくても良いのですよ」。

すると嬴は

「私は彼の立派な風采からひとかどの信頼出来る人物だと思ったのだが、彼の話の内容が全くでたらめなのにすっかり嫌気がさしてしまった。このまま彼と一緒に行っても、得るものがあるとは思えない。だから考え直し



満柏

満柏 画

て帰って来たのだよ」

と言いました。

結局、陽処父という人は嬴の印象では正に“見かけ倒し”の人でした。それで嬴は毅然として陽処父と別れたのです。

■注記

左伝：春秋左氏伝のこと。「春秋」の注釈書。30巻。魯の左丘明著と伝えられる。春秋三伝の一。歴史的記事に富み、説話や逸話を多く集め、また、礼制に詳しく国家興亡の理を説く。

(小学館 デジタル大辞泉より抜粋)

四姑娘山は四川省北部のアバ藏族羌族自治州小金県に在ります。主峰は6250mで南側の麓に町が有ります。昔は川の合流点を意味するチベット語を音訳した「日隆」と呼ばれていましたが、2014年から山の名前と同じ「四姑娘山」に変わりました。町の標高は約3200mですが、緯度が低い(北緯31度位)ので日本の標高3200mの山よりはずっと過ごし易いです。樹林限界で日本と比べて見ますと、富士山が2500m位なのに対して四姑娘山は4100m位です。

6250mの山が傍に在るため真冬の朝は零下10度以下の日が続きますが、3月の下旬に入る頃になると、未だ朝氷が張るものの日中の陽射しが暖くなり草の芽の緑が目につくようになります。そして一番に咲く花が春リンドウ、(学名 *Gentiana thunbergii*)、です。日が昇って陽射しを1時間位浴びてから青い花を開かせますが、蜜蜂も早々と飛んで来てリンドウの花に顔を突っ込んでいます。この頃、水気の多い所では「ツクシ(学名 *Equisetum arvense*)」も沢山顔を出します。当地のツクシは日本のより黒づんで見えます。未だ時々雪が降る日の有る中で「春リンドウ」や「ツクシ」は「春が来たよ!」と叫んでいるように思えます。

町から川に沿って標高を400m位下げると桃の花が満開で、更に400m位下がると梨の花が満開、更に400m位下がると林檎の花が満開です。春は川に沿っ



水気の多い所ではツクシ

て上って来ています。これから一月位過ぎると、四姑娘山の麓の町で山桜が咲き始めます。そしてもう少し標高の高い所では紫色のサクラソウや黄色いケシも咲き始めます。四姑娘山は春まもなくです。

●大川さんのホームページはこちら

<http://rgyalmorong.info/index.htm>

<http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>

▶お知らせ：女王谷のHP

(<http://rgyalmorong.info/>) に、当地の風情を紹介するサンプルビデオ(MP4形式8MB前後)1分余り×15本を追加しました。日本語HPに入って頂いて、先頭頁の左下に有る、「風情のあるビデオ」でご覧になれます。

(<http://rgyalmorong.info/scholaweb/queenvideo-j.htm>)



真っ先にハルリンドウ



早々と蜜蜂

元寇と鷹島 (その7)

寺西 俊英

「元寇と鷹島」のシリーズは仕上げの段階に来た。今回と次回は鷹島の島内にある、元寇に関する遺跡を中心に話を進めていきたい。

鷹島については、(本稿その1)で概要を紹介したように長崎県の松浦市に属している、面積は17平方キロ余の小島である。「弘安の役」がなければ、失礼を顧みないで申し上げればほとんど話題にさえ上らないような島に思える。ところが、である。友人のMさんから教育画報(2014年2月10日刊行)の「日本のすごい島調べ事典第1巻」に掲載されているある調査のデータを教えてもらい、大変驚いた。平成21年の調査であるが、日本にある約7千の島々(海岸線が100m以上ある島)の中で、本州、北海道、四国、九州、沖縄本島を除き観光客が多い島は——①石垣島(約72万人)、②佐渡島(約60万人)、③鷹島(約59万人)という結果が出ているのである。一瞬目を疑った。奄美大島や淡路島はなぜベスト3に入らないのか、と思ったが住民の数ではなくあくまで島外から来た観光客の数なのだ。鷹島は2015年7月時点の人口が2333人なので、およそ島の人口の250倍もの観光客が来た計算になる。

観光客が多かった理由は、まず九州本土と鷹島間に2009年4月に鷹島肥前大橋が架かった(通行料無料)ことが挙げられるであろう。飛行機や船でしか訪問する手段のない島と比べて利便性が一気に向上した訳である。大橋の開通効果が寄与したことは間違いない。また元寇の船が島の周辺に何千隻と沈んでおり、昭和55年から水中考古学調査が始まっていたことも人々の関心と呼んだと思われる。これから述べる島内のいくつかの記念碑にまつわる悲しい歴史を知った方々の訪島もあったであろう。

ここでいくつかの遺跡を紹介したい。

■開田の七人塚

この塚は島の南西端にある船唐津港からすぐのところにある。平成21年9月30日に松浦市の指定史跡に登録された。文永の役(1274年)の時、鷹島に



鷹島歴史観光地図

上陸した元軍は、博多湾の防衛のため手薄となった鷹島に上陸し、島民のほとんどを虐殺したのである。開田は当時山深く人目に付きにくい場所であった。そこに一軒家があり8人家族が住んでいたところ、不幸にも飼っていたニワトリが鳴いたため元軍に発見され、8人のうち7人が殺された。今はその場所に「開田の七人塚」と彫った石碑が建てられている。ここに石碑に記してある「七人塚の由来」を原文どおり紹介する。

文永11年(1274年)10月17日頃、東浜に上陸した元軍はわが防衛の不備に乗じて、本島住民のほとんどを虐殺したのであるが、現在開田付近は当時深い山林内にあり、一家八人が隠れていたところ、不幸にも鶏鳴を聞いた元軍に捕らえられて七人は殺され老婆一人が灰だめにかくれて助かったという。以来今日まで開田の人は鶏を飼わないのである。今年700年にあたり、当時の古塚跡に祖先の霊を慰めるため七人塚を建立した。

昭和56年7月18日 建立者 小田嘉和 合掌

700年以上経った昔のことであるが、今でもこの地の人々はニワトリを飼わないことに心を動かされた。おそらく殺された7人への供養の気持ちを受け



鷹島肥前大橋 (Google Panoramioから)

継がれているのであろう。

■対馬小太郎の墓と対馬兵衛次郎の墓

2人とも対馬の人で、宗助国(1207年?~1274年)の家臣であり、1281年弘安の役で鷹島において戦死した。2人を語る前に「宗助国」について触れたい。

助国は、対馬の宗家の2代目であり、大宰府にいた守護の少弐氏の対馬守護代である。当時対馬において阿比留親元が反乱を起こしたため、大宰府から「惟宗重尚」が派遣され平定したので、阿比留氏に代わって島主(守護代)となった。助国は重尚の弟である。「惟宗」姓から「宗」姓となったのだが、これについて司馬遼太郎はその著書「街道を行く」の13番「壱岐・対馬の道」で次のように書いている。「惟宗氏が惟の字を取り除いて単に宗氏を称したのは、朝鮮との関係ができてからのことであろう。藤原氏もかつて遣唐使として渡海するときは藤と称し、三善氏も善と称したりしたが、それと同じである」とある。中国人の姓にも「宗」があるが、一字の方が馴染みやすかったのであろうか。対馬の宗氏は、たびたび日本史に出て来るがその姓についてこのような経緯があったとは全く知らなかった。

再び2人の話に戻る。1274年の秋、元軍が対馬の西海岸・佐須浦沖に姿を現したとの島民の注進があり、助国とその一族郎党80余騎は現地に急行した。助国はまず通辞(朝鮮語を話せる通訳)を使者として元軍に向かわせようとする、元軍は問答無用とばかりいきなり船上から雨のように矢を射かけてきた。さらに千人の軍勢が上陸し、合戦となったのである。80余騎はよく奮戦するも衆寡敵せず追い詰められていった。助国は討たれる前に郎党の小太郎と兵衛次郎を呼び寄せ「戦場から脱出して事の次第を大宰府へ

告げよ」と命じた。2人は激戦の中、小船で抜け出し博多に上陸して大宰府に急を知らせた。そして博多に留まり、80余騎のかたき討ちとばかり弘安の役でも目覚ましい働きをしたのである。ついには2人とも討ち死にしたが、重傷を負い自刃した小太郎はその時に、「我が屍を対馬が望める丘陵に埋めて欲しい」と言い残した。小太郎の墓は、遠く対馬を望む鷹島の中央部の西側に建てられた。兵衛次郎の墓は島の東の神崎の地に建てられている。

文永の役と弘安の役で獅子奮迅の働きをした2人は、愛称とも尊称ともいえる名前で呼ばれているようだ。小太郎は「対馬様」と呼ばれ、兵衛次郎は「石堂様」と呼ばれている。

ところで、小太郎と兵衛次郎については、直木賞作家である白石一郎(1931年~2004年)の「蒙古の槍」に詳しく描かれている。白石は釜山の生まれで本籍は壱岐市である。海への関わりをライフワークとした小説家として知られている。本稿の終わりに史実に基づいたこの小説の触りを要約して紹介したい。



この小説は、長さが一間で長柄の中央に金具の環がついている、2本の蒙古族の使う槍についての物語である。1本は鷹島に住む、主人公である某老人の持つ槍で、可愛い5歳の孫の胸に突き刺さっていたものである。もう1本は小太郎の持つ槍である。彼らの出会いは、大宰府から鷹島に派遣された2人を老人が道案内を命じられたことによる。その時お互いに持つ槍が同じなのに驚くところから物語は展開していく。小太郎の持つ槍は、実は宗助国の首に突き刺さっていたものを主君の奮戦の証として引き抜いたものであった。主君から大宰府へ急を知らせるように主命を受けた2人であったが、去りがたい2人は岩陰に隠れて助国の討ち死にを目撃したのである。……物語の最後は弘安の役で攻め寄せてきた元軍にそれぞれが立ち向かい孫や主君の無念を果たすのであるが、小太郎は不運にも毒矢があたってしまう。今はの際に「わしを対馬の見える丘に埋めてくれ」と言って息絶えた。

(つづく)

➤ 二葉亭四迷がエスペラントを売り出す

第1回世界エスペラント大会が開かれ、ヨーロッパの知識人に迎えられたエスペラントですが、日本にはどのように伝えられたのでしょうか。いろいろと説があったようですが現在は、二葉亭四迷(本名、長谷川辰之助)が最初に日本に伝えたと言われています。

二葉亭四迷は1887(明治20)年、言文一致体で書いた小説『浮雲』で有名です。しかし父から、文学などをやるような三文文士は“くたばってしまえ!”と言われ、筆名をこのようにしています。もともとロシア語を学んでいてウラジオストックにいた1902年ごろ、当地のエスペラントの学習会に参加し、フォードル・A.ポストニコフというロシア人からエスペラントを学びました。このポストニコフは、ペテルブルグでザメンホフからエスペラントを教わりました。

翌年、二葉亭が日本に帰国したところ、ポストニコフが後を追うように東京の二葉亭を訪ね、お金は出すからエスペラントの教科書を翻訳して出版してくれと依頼しました。そうして二葉亭は、ザメンホフ博士著『世界語』、続いて『世界語読本』を1906年、東京の彩雲閣から出版します。

この二つの本が予想外に売れ、ベストセラーになりました。朝日新聞がその年の末、「今年は浪花節とエスペラントが大流行」と書いたほど、エスペラントはインテリなどに大きな影響を与え、浸透しました。

またほぼ同時に、岡山にいた第六高等学校のG.エドワード・ガントレットという英語教師がエスペラントの通信教育を始めました。ガントレットは、金沢にいた宣教師であるD.R.マッケンジー

から入門書を借りてエスペラントを学びました。およそ700人の日本人がこの通信教育で学んだようです。ガントレットの妻になった恒子の弟が作曲家で有名な山田耕筰で、彼もエスペラントを学びました。

また一方、留学中のドイツでエスペラントを学んだ丘浅次郎という生物学者もいます。

➤ エスペラントに魅せられた柳田国男

国際共通語としてのエスペラントの魅力に惹きつけられた日本人は多くいますが、ここでは近代日本の知識人としてユニークな何人かを挙げておきましょう。

そのひとりが柳田国男です。柳田は日本全国各地を歩き、日本人とはどういう人たちなのかを追求し『遠野物語』を著した高名な民俗学者です。この柳田がエスペラントに熱心に取り組みました。

その契機になった人物がグスターフ・ラムステットというフィンランド人です。彼はアルタイ語学者ですが、ロシア十月革命によってロシアから独立したフィンランドの最初の公使として日本に赴任しました。

ラムステットは民俗学者でもあり、またエスペランティストでした。彼は日本で多くのエスペランティストに歓迎され、各地で講演しましたが、英語ができないという彼は、すべての講演をエスペラントで行い、日本人のエスペランティストが通訳しました。

柳田は同じ民俗学の仲間であったラムステットと交流し、エスペラントを学ぶようになったのです。柳田は1922年、国際連盟の委任統治委員会日本代表としてジュネーブに滞在していた時、国際連盟はエスペラントを公認の言語として採用す

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ!」Ⅲ
日本のエスペランティストたち

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おもしろいよしひろ)

べく、新渡戸稲造らと働きかけました。

英語やフランスを母語としない国々の外交官にとってエスペラントはどこかの国の言葉でもなく、誰もが負い目を持つこともなく使え、言語の公平さ故に公用語にすべきと推進したのです。しかし結果は、フランス政府などの反対によって潰されました。実は近年でもEUでエスペラントを共通の言語にしようという動きがありました。英語やフランス語を使う場合、通訳や翻訳に費やされる費用と人の多さを考えると、国際共通語であるエスペラントの採用は大きな利益をもたらすからです。しかしこの時も、英語が国際共通語だと言い張るイギリスなどの反対によって潰されてしまいました。

フランスやイギリスは“大国”としての面子から、どうしても英語とフランス語を自国の国益のために、エスペラントを公用語にすることに常に反対するのです。

言語帝国主義という言葉があります。まさに英語帝国主義、フランス語帝国主義です。英語やフランス語を母語としない小国の人々は常に、彼らよりはうまく喋れず、負担を強いられるこのような言語状況がいいのかどうか、本気になって考える時期ではないでしょうか。

➤ 宮沢賢治もエスペラントを学ぶ

もう一人、ラムステットの講演によってエスペラントに目覚めたユニークな日本人が宮沢賢治です。『風の又三郎』『注文の多い料理店』『銀河鉄道の夜』などの作品によって、今でも多くの人々に愛されている宮沢賢治は東京でラムステットの講演を聞きました。

ラムステットはアルタイ語、モンゴル語、朝鮮語などを研究しながら、日本に10年間滞在し、エスペラントの普及にも貢献しました。そして講演の中で「やっぱり著述はエスペラントによるのが一番だ」と語るのを聞いた賢治ははいたく感心し、さっそくエスペラントを学んだといいます。賢治の架空の理想郷に、故郷の岩手をモチーフとした

「イーハトーヴォ」という言葉がありますが、近年の研究によれば、イーハトとは、岩手(イワテ)をエスペラント式にしたものだと言われています。

彼の全集を繙けば、エスペラントについて書かれたものを見ることができます。賢治を尊敬している作家・井上ひさしが、エスペラントに並々ならぬ関心を持ち学習したという説もありますが、けだし当然といえるでしょう。

➤ 大杉栄は中国にも影響を与えた

このような異色のエスペランティストがいる一方、エスペラントは多くの社会主義者らに影響を与えました。その運動の先頭を走った堺利彦が「平民新聞」廃刊後に出した「直言」という新聞にエスペラントを紹介しました。この堺の発信が社会主義者らの知識人に大きな影響を与え、山川均、高島素之、片山潜、吉野作造らがエスペラントを学びました。その中の一人にアナーキスト(無政府主義者)の大杉栄がいます。

大杉栄といえばアナーキスト、アナーキストといえば大杉栄と言われるほど、この世界では有名な男です。残念ながら大杉は関東大震災直後、憲兵隊によって妻の伊藤野枝と甥と一緒に虐殺されました。一般的に、下手人は甘粕正彦と言われますが真相は、甘粕は直接手は下さず、憲兵隊の罪を背負ったと思われます。この点については本誌2012年5月号に「甘粕正彦と大杉栄」という文章を書きましたので見ていただければと思います。

大杉は何度も獄中に入りましたが、その都度、外国語をマスターしたと言われています。『自叙伝・日本脱出記』にはこんな文章があります。「元来僕は一犯一語という原則をたてていた。それは一犯ごとに一外国語をやるという意味だ。最初の未決監の時にはエスペラントをやった。つぎの巢鴨ではイタリア語をやった。二度目の巢鴨ではドイツ語をちっと噛った。こんども未決の時からドイツ語の続きをやっている」と書き、ロシア語、スペイン語も学習したようです。大杉は東京外大フランス語科を出たこともあり、語学好きだったの

でしょう。

大杉は時の政府に対する社会的な闘いに先頭を切って活動する一方、〈フリーラブ〉と言い、自由恋愛論者として〈女性活動〉!にも活発でした。

堀保子、伊藤野枝、神近市子ら先進的な女性たちと恋愛をして、時に三角関係、四角関係にまで発展し、葉山の日蔭茶屋では、女性と一緒にいたところを神近市子に襲われ刺されるという事件にまでなりました。

戦後、神近は社会党代議士として活躍します。時にテレビに映る神近の姿を見ては、若かりし頃は、こんな情熱があったのだと感慨にふけりました。この日蔭茶屋事件は当時の新聞などを賑わしましたが今なら連日、テレビや週刊誌で話題を独占していたことでしょう。

1960年代に学生時代を過ごした私は大杉栄に魅かれましたが、近年また、〈日本で最も自由だった男〉として再び脚光を浴びています。大杉は〈自由恋愛〉というだけでなく、日本を秘かに脱出して上海やフランスに行き海外のアナーキストと交流するなど、その自由な生き方が、何かしらせせこましくなっている現代日本に対する批判的な視点を提供しているかもしれません。近年、小説の主人公として描かれたり、ユニークな刊行物で大杉栄が特集されています。閉塞した日本に対するアンチテーゼのようなメッセージを大杉は持っていると言えるでしょう。そして実は、大杉は中国のエスペラント活動にも積極的に寄与しているのです。

(続く)

※参考文献は最終回に列記します

【トピックス】 果敢二胡リサイタル

3月号で、'わんりい' 会員の崔貞さんが、崔さんと同郷の、目下フランス・パリで活躍の二胡演奏家・果敢さんの紹介をされ、果敢さんの初来日演奏への呼び掛けをされました。

呼び掛けに応じて 'わんりい' 会員の皆さんが多数参加された、果敢さんの '二胡リサイタル' (4月8日(金)、成城ホール/小田急線沿線) は崔貞さんの努力の成果もあってか満席でした。

果敢さんの演奏は二胡独特の深い音色もさることながら、きっと果敢さんご自身の持ち味であろうと思われる若さある艶やかな音色が加わり、桜の季節にふさわしい華やかさがあるものでした。果敢さんのオリジナル曲も素晴らしく、演奏会終了後は、満席の会場からは惜しみない拍手が湧き上がり、予定していなかったとのアンコールに再び割れんばかりの拍手でした。

果敢さんは日本の桜の季節を楽しまれ、また日本の皆さんの温かな声援をととても喜ばれて、フランスへ帰られたとのこと。再来日の機会を期待したいものです。

(田井光枝)



ほとんどの参加者が帰られた演奏会后、果敢さんと古箏の戴茜さんを囲んだ 'わんりい' メンバー達 (撮影:河本義宣氏)

みなさん、先日はお忙しい中、4月8日に成城ホールで行われた「果敢二胡リサイタル2016」に多数お越し頂き、みんなの応援のお蔭で無事にコンサートを終了することができました。'わんりい' の紙上を借りてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

果敢さんはコンサート終了後に、皆さんと記念写真を撮ることができて大変喜んでおりました。'わんりい' の皆様宛に下記のメッセージを頂きましたので掲載させていただきます。

尚、4月25日、北京のフランス大使館でフランス文化部より果敢さんへの芸術文化勲章の授賞式が行われました。ご報告いたします。

(崔貞)

【果敢さんよりのメッセージ】

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’の皆さまへ

4月8日に開催された「果敢二胡リサイタル2016」にお越し頂き、加えて温かいご支援も頂き心から御礼申し上げます。パリに無事に戻り、早速、ジャズヴァイオリニストとのコンサートを行いました。日本の皆さまから頂いた勇気と感動を忘れることなくこれからも精



北京のフランス大使館での授与式

力的に音楽活動を続けて参ります。未長くご支援をお願い申し上げます。

4月14日、九州熊本地域を中心に発生した強い地震を知り大変驚き、心を痛めています。皆様の安全と、現地の一日も早い地震からの復興をお祈りします。私の二胡の演奏で九州の皆さまに元気になって頂く機会があればと願っています。

(果敢)

● <http://fcnn.fr/forum.php?mod=viewthread&tid=1207&from=portal> ← 授賞式を報道したフランスにある中国語のホームページを頂きました。時間の許す折ご訪問してご覧ください。

中国の笑い話 27 (「365夜笑話」より)

翻訳：有為楠君代

第81話：お腹の中の子供

一人の妊婦が歩いていると、小さな女の子が走って来て、彼女に話しかけた。

「小母ちゃんのお腹はどうしてそんなに大きいなの？」

「お腹の中に子供がいるからよ」

「小母ちゃん、何か面倒なことがあったの？」

「え？ どうしてそう思うの？」

「だって、小母ちゃんは、赤ちゃんを抱いていると不便だったので、赤ちゃんをお腹の中に入れてしまったんでしょ？」

第82話：男の子が私を食べる

ある幼稚園で、先生が子供達に歌を教えている。 “ねえ～そこの男の子 (lang)、私の傍に来て、一緒に遊びましょう～”

先生が始めの部分で歌うと、一番小さな女の子 玲玲が、わっと泣き出した。先生は驚いて、「玲玲、どうして泣くの？」と訊いた。玲玲は、眼に一杯涙を浮かべて言った。

「わたし怖い」

先生「どうして怖い？」

玲玲「狼 (lang) が来れば、食べられてしまう

わ。狼 (lang) を来させないで！」

第83話：太陽に行く

お父さんとお母さんが話をしていた。

「人類もとうとう月に到達したね。科学技術の発展は本当に素晴らしい！」

それを聞いた小冬が話しに割り込んだ。

小冬「月に行くのなんて大したことないよ。僕達は将来太陽にいけるようになるんだよ」

お父さん「太陽は、近づくと、何でも焼いてしまうんだよ！」

小冬「パパ、考えてみて。燃えないように、夜近づけば良いんだよ！」

第84話：時計を洗う

朝眼を覚まして、父親は腕時計が止まっているのを見つけた。

「腕時計が止まってしまった。時計屋さんに持って行って、分解掃除をしてもらわなければならないな」

それを聞いて、幼い娘が言った。

「パパ、大丈夫よ。その腕時計、私が昨日洗面器の中で洗っておいたから」

東西文明の比較 (4)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

今回は、日本列島が約3万年前に始まったことを書きました。今回は、その続きを述べてみたいと思います。なお、専門用語をたくさん使用しましたが、興味をお持ちの方はウィキペディアなどをご参照いただきますと学生時代を思い出すのではないかと思います。

石刃技法の登場。ナイフ形石器とその生活文化

今から2.2万年から2.1万年前、九州鹿児島島の火山(桜島)が大噴火し、その火山灰は関東から東北地方にも降りそそぎました。その火山灰の層を始良^{あいら}といい、「始良層」と

いう日本の旧石器時代を測定する基準になっています。東京の西、武蔵野台地は関東ローム層という赤土の地層があります。国際基督教大学(ICU)の敷地内で発見された野川遺跡はこのローム層にあります。ローム層は厚さ4メートルに及び10の文化層で構成されています。その中に2層の黒土層(始良層)があります。この地層からは多くの石器が出土しました。

最深層(3.2～2.0万年前)から粗雑な石刃石器、斧形石器、礫器などです。2層(2.0～1.3万年前)からは石刃石器、ナイフ形石器、尖頭器、彫器など多様な石器。3層(1.3～1.2万年前)から細石刃石器(ナイフ形石器は消滅)。4層(1.2～1.0万年前)から両面調整尖頭器(石槍)を持つ石器群が発掘されています。

ここで注目されるのが最浅層から突然「石刃技法」が出現したことです。原石を加圧して石刃を何枚も剥ぎ取る技法で、一度に数多くの石刃を得ることができます。ナイフや槍先にも使うことができます。石材には黒曜石が最適ですが、黒曜石の原産地は限られています。東京の武蔵野台地にある

野川遺跡から出土した石器は16,000年前までは箱根産、それ以降の石器は長野県産の黒曜石でした。この時代に200キロを超える広域圏の交流があったのです。

石刃技術の発展でナイフ形石器が量産され、日本列島全土で普及します。ナイフ形石器文化といわれ、ナイフ形石器が優先する関東以西と、尖頭器とナイフ形石器が併用された東北以北に二分した文化圏ができました。

そしてこれらの石器を使って日本列島の住民はどのような生活を繰り広げていたのでしょうか。約2万年前氷河時代の厳しい自然の中で過ごす防寒衣服は、オオツノシカやヘラジカの毛皮で作られました。ズボンや靴はナウマンゾウや野牛ヒグマの毛皮を利用しました。

食料は大型獣・中小型獣の肉や血・内臓など。焼肉や燻製にすると同時に移動の際の携帯食料として干し肉としました。植物性食料については、東北日本の亜寒帯針葉樹林でコケモモ・クロマメノキなどの漿果類やハイマツ・チョウセンゴヨウの実です。西日本の落葉広葉樹林でクリ・クルミ・ヒシなどの賢果類やヤマブドウ・サルナシ・キイチゴなどの漿果類、ウバユリなどの根茎類が食用とされていました。当時本州から北九州に広く分布していたチョウセンゴヨウの実は栄養価が高く重要視されていました。加熱調理は水を入れた木器や樹皮製容器に加熱した自然石を投入し、煮たり蒸したりしました。

住居に関しては北海道の中本遺跡や長野県の駒形遺跡には浅い竪穴状の遺構の中に炉跡が発見されています。大阪河内平野の羽曳野(はびきの)丘陵の北にある「はさみ山古墳」には、東西6・南北5メートルの楕円形の竪穴住居があります。13～14本の柱で上屋を支え、住居の西隣に炉跡があります。ナイフ形石器などが238点も発掘されており、住居が生活の拠点になっていたことがわかっています。

細石刃文化と大陸文化との交流

ナイフ形石器が主体の旧石器時代は13,000年前ごろ終わります。ナイフ形石器に代わって登場し

た細石刃石器が日本列島に広がります。小さな石片を骨や角や木の軸に溝を掘って小さな石片を埋め込んで樹脂やアスファルトで固定(植刃)させて槍・鋸・ナイフとして使います。実はこの細石刃式用具は世界の広範な地域から発見されています。

日本では長野県野辺山高原の一角の矢出川遺跡、新潟県荒屋遺跡があります。しかしこの両遺跡が示す文化は、石材や石器の組み合わせ、更には細石刃技法において全く異なります。矢出川遺跡の円錐形(または角柱状)の細石核を持つ文化は関東・中部南部・近畿・中国四国地方に分布し、一方荒屋型のクサビ形細石核をもつ文化は中部北部・東北・北海道地方に広く分布しています。クサビ形細石核を用いる細石刃文化はユーラシア大陸のシベリアで生まれ、モンゴル・中国北部・朝鮮半島など東アジアで発達しました。

「円錐形細石核文化圏」と「クサビ形細石核文化圏」という2つの文化圏は関東・中部地方を境にしたのでしょうか。関東以西の旧石器時代人は細石刃を取り付ける新式槍の着想は受け入れますが、細石刃の製法や石器の種類を取り合わせは、従来のままでした。言い換えれば東北・北海道地方では新しい細石刃文化がナイフ形石器文化に取って代ったのですが、西日本では、古い在来の文化に新しい外来の文化を取り入れ変容させたといえます。

この「これまでと異なる文化」の誕生には自然環境の変化があるでしょう。約13,000年前から日本海の気候変動が始まりました。対馬暖流が徐々に日本海に流れ込むようになり海水温が上昇し、冬には日本列島に雪が降るようになりました。従来日本海沿岸は氷河時代のような大陸的な寒冷で乾燥した気候が続いていましたが湿った空気で覆われるようになり、その結果、ブナやナラの森林が拡大しました。このような環境の変化によってマンモス、ヘラジカ、ヒグマ、野牛などが日本列島でも見られるようになり、シベリアに源流をもつ狩猟文化が広がってきました。

一方、太平洋岸を中心とした関東以西は氷河時代

以来の寒冷な気候が続き、比較的乾燥した地方はシベリア的狩猟文化を受け入れつつもこれまでと同様な生活が続きました。

やがて気候の温暖化により日本列島の植生が変化し、動物もナウマンゾウのような大型動物からシカやイノシシのような中小動物中心の狩猟生活となり、細石刃石器に加えて「落とし穴」の工夫などもなされながら狩猟と植物採集を合せた生活が続きます。が、上記のように日本列島は中部地方を境に2つの文化圏に色分けできる傾向は、旧石器時代に始まって以来今日まで続いています。

前回にも書きましたが、日本列島へ大陸の文化が運び込まれた玄関口は二つです。3～2万年前シベリア・バイカル湖周辺で誕生した文化は北海道経由して東北地方へ向かいました。黄河流域、長江流域で生まれた文化は九州地方を窓口として関西地方へ流入しました。その結果、南北に縦長の日本列島の気候の特色も加わって、西と東とで大陸の文化を受け入れ発展させた基盤が異なるのは旧石器時代に出来上がったと考えられます。

縄文時代の幕開け

日本列島の旧石器時代が終わると、日本独自の文化が芽生えます。縄文文化の誕生です。縄文時代は日本文化を大きく変えました。土器と磨製石器などを持つ新たな文化の誕生です。そしてその文化は現代に連なる点で大いに評価されます。ヴュルム氷期の終りが近づくと、厳しい寒さが次第に緩みはじめました。そのために約15,000年前あたりから、日本列島も温暖化が進みました。それにより、モミ、ツガなどの針葉樹林が姿を消し、ブナ、ナラなどを中心とする落葉広葉樹林が広まりました。多くの木の実が稔り、ニホンジカ、イノシシなどの中型動物が棲む豊かな土地になりました。温暖化が進み、海面が上昇し、山間の沢であったところが、浅い内海になると内陸より養分を含んだ河川が流れ込みました。プランクトンが繁殖して魚介類が繁栄。こうして縄文人には「狩猟・採集・漁労」の場が与えられたのです。

(以下は次号で…)

随分昔のことになるが、紅茶文化発祥地のイギリス旅行をした。1日に何度もティー・タイムがあったのに、全く心を止めることがなかった。その後、ロシアやトルコのアップルティー、モロッコのミントティー、インドやネパール、ミャンマーのミルクティーなどそれぞれの国柄の紅茶に出合った。当時は現地生産の紅茶だと思い込んで飲んでしたが、とにかく美味しかった。ところが、忘れもしない2009年6月28日に、日本スリランカ友の会定例会で隣席した会員が面白いお話をされた。元三井農林という会社にお勤めされていたが、「スリランカの紅茶は世界一だよ。このビジネスはね。紅茶畑で買い付けたものを適量にブレンドして、他社の紅茶を目隠して飲み比べるんだ。味をみたところで、あゝ・・・これがうまい!! と決まったところでブラインドテスト終了。我々の会社の日東紅茶だったよ」と、その頃を振りかえられて大笑いされた。以来、私はリプトン、トワイニングなどの紅茶を飲みあさり、ウェッジウッドなどの陶磁器と紅茶用具に至るまで入り込んでしまった。セイロン紅茶に関する機縁話である。

スリランカの紅茶

スリランカの国で生産されているのに、誰もが「セイロンティー」と呼称するのを耳にする。現在はスリランカの主要輸出品となって、輸出額は第2位であると聞いている。ゴムやココナッツの三大ブ

ランテーション中、最大の規模を誇る紅茶は、イギリス植民地時代に始まった。イギリス植民地時代、この国がセイロンと呼ばれていた名残りで「セイロン」の名が今でもセイロン紅茶として名残をとどめているのであろう。

1972年、国名がスリランカになり、「スリランカ民主社会主義共和国」が誕生した。何だか、資本主義と社会主義が同居する国のイメージだが、何処かで調和されているのであろう。街を走る車の中から眺めていると、仏様の像が点在する風景に触れる。仏様の心がこの国の和を保って下さっているのではないかしらと思う。日本にもそうした心の支柱があれば良いのにと、改めてスリランカが仏教国であることを再確認する。

横道に入ってしまったが、紅茶の話に戻ると、1本の茶の木から紅茶、ウーロン茶、鉄観音、煎茶などの清茶が作り出される。完全発酵茶が紅茶である。中国茶は一定の時間だけ発酵させた中間的なものが多い。発酵させないで、蒸したり炒ったりするのが緑茶であり、日本茶も緑茶の仲間である、といったことがいつの間にか分かってきた。

紅茶はタンニンが主成分で、生活習慣病の1つである活性酸素による体内の酸化を防いでくれる。疲労回復、ダイエット効果、食欲増進などの効果があるので、東洋の秘薬として紹介されてきている。それ程、セイロン紅茶の商品価値が高いことでも知られている。私は何度かヌワラエリヤに訪れ、丘陵で栽培されている茶畑を眺めた。グリーンマットを敷き詰めたような茶畑は、約1880～2000mの海拔で、お茶の栽培に適しており、茶葉の名産品を生んでいるという。

因みに、中地のキャンディは1200m、低地産のルフナ、サバラガムワなどは600mの標高である。人々に好まれる紅茶が生産されるためには、先ず茶葉栽培の温度と豊富な水が不可欠な条件であり、茶葉栽培に適したスリランカは、正にティーベルト地帯であるといえよう。



ヌワラエリヤの紅茶プランテーションにて

🍵 ゴールの紅茶

2015年2月28日、タランガッレ・ソーマシリ師の出生地タランガッレの近郊マルガッタに行った。師の親族が集い、前夜から心を入れて作って下さったスリランカ料理の接待を受けた。紅茶畑に建つロッジで、口に運ぶスリランカの味は格別であり紅茶も抜群であった。ソーマシリ師によれば「ゴール地方の紅茶は中近東やロシアに売られているけれど、昨今、中東は戦争が頻発して出荷量が減少しているんだ。その代わりに、シナモンや胡椒が栽培されている畑もあるよ」とのこと

である。それにしても、当地域の生産量はセイロンティーの約半分を占めているとか。おみやげにいただいた紅茶は黒っぽい茶葉で水色(すいしょく)は赤茶色を帯びてみえた。ミルクティーにマッチする。もしかして、肥料も関係するのでしょうか？ 私は足を下ろし



標高 2000 ~ 2500m 級の山々が連なる高原地帯。ヌワラエリアの紅茶畑

た国々で紅茶を飲ませていただいたが、スリランカの紅茶をスリランカの生産地で味わい何ともいえないその風味を味わうことができたことは、至高の喜びであった。

🍵 ヌワラエリアの紅茶

2015年3月1日、ヌワラエリアを通った。紅茶サロンでひと休みすることにした。ついでに紅茶工場も見学させていただけた。由緒ある紅茶工場センターで、伝統的なオーソドックス製法でタミル人女性がガイド役であった。

説明をまとめると、一定レベルに育った芯芽や若葉が1芯2葉で摘採され、次に水分を減少させるために陰干しをする。続いて、機械で葉汁を絞り出し空気に触れさせる。発酵に役立つ酵素の動きを高めるためだという。更に、発酵室に移し玉解きと発酵、乾燥、等級分けがされる。工場を歩いていくと、見た目にはどれが良質で魅力的な味わいのある紅茶なのか、素人の私には分からない。

スリランカで最も高い地域の気候風土は、7月から9月にかけて南西モンスーンが吹き、その影響で霧がでる。山脈を越えてきた風で霧がなくなり。一気に茶葉を乾燥させるという。それによって低産地にない独特の茶が生産されているとのことであった。世に名高い「ウバ」という地名は険しい山や谷に吹きすさぶ風音によっている。セイロンティー「ウバ茶」は茶褐色をしたお茶であるが、水色は真紅色である。その美しさもさることながら私はウバ茶以上に、ウバ州に残る仏教寺院と、信仰

心が厚いシンハラ人に敬服し感銘した。

🍵 紅茶のみやげ

紅茶サロンでティータイムを楽しんだ後、みやげ物は既にセイロンティーと心に決めていたので紅茶を買った。家庭用と、とびっきり高価な最高級品を買ひ、日本へ持ち帰って来た。後者は葉が極少しか採取でき

ない高質の茶葉によるために、高価である事情が述べられていた。

さて、我家に来客のあった折に、おもむろに茶袋をカットし、前置きもくどくどと伝え、正しい紅茶の入れ方に従ってそつなくカップに注ぎ入れた。

「さあ、セイロンティーを召し上れ、銘茶でござい」

の前口上の割には、何ともしまらない味であった。何ということか。その後もずっと心にひっかかっていたが、ひょんなことから高い品質のお茶の入れ方について知らされた。私は、水質やお湯の温度など基本的な知識をマスターしていなかったのだ。紅茶についての知識の浅さでは、高級紅茶の優雅な味わいを堪能できない。紅茶についてまだ十分な知識が欠如していたのだと知り悔しさを感じた。やっぱり、身の丈に合ったゴールの紅茶の味わいを懐しく感じた。

(写真提供：為我井輝忠氏)

中国・義烏市でパン作りの指導をする II

杉野 一

‘わんりい’ 4月号で書いたように、義烏市に新しく建てられたこのホテルに日本人は私一人ですが、仕事はやるしかありません。片言の中国語で、筆談しながら製パンの基礎を説明し指導していきました。パンを焼く上で大切なのは時間・温度・計量の3点ですがこれを、又、守って貰うのが大変です。何しろ、私の指導でパンを作る中国人はこれまでパンを焼いた経験がありません。人数は多くありませんが、それぞれ、広大な中国の、遥か遠方の農村を故郷にしている人達です。しかし、皆真面目な人たちで私の説明を一生懸命に聞いてくれました。

さてこれからの問題は、如何に美味しい日本のパンをホテルに来るお客さんに提供して喜んで貰えるかです。ホテルに来る客は世界中からやってきます。ホテル開業の日は、それらの人々に喜んで貰えるパンでありたいと、食パン、フランスパン、餡パンなど、日本で作られるパン各種を混ぜ合わせて27種類ほどのパンを焼き、その他、味噌汁や海苔巻づくりなどの指導もしました。

私がパンの指導をしていたホテル「海洋酒店」の写真を、前号の‘わんりい’でご覧くださったことと思いますが、このホテルは義烏市の国際商貿城で、全ての商店が入ると8万7千店舗になるような広さで、見物するだけでも一日では無理です。そのような所ですからアフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、日本などなど世界中から客が集まります。

実は、ホテルがオープンした当初は日本人は少なく、ヨーロッパからの人々が多く来ました。それでかどうかはっきりしませんでした。何故か何種類ものパンの中でフランスパンだけが、毎日早朝から焼くのですが、焼いても焼いても足りません。それで食堂の様子を見てみると、ホテルの客たちがフランスパンにハムやベーコンをはさんで昼食の分まで持って行ってるということが分かり、その後いろいろ対策を考えて、フランスパンが誰にでも行き渡るようにしました。まあ、そんな事などいろいろありましたが、食パン、バターロールなどもお客さんたち



「海洋酒店」の売りに功勞したことへの荣誉称号を受ける

に喜ばれました。

そして日が経つにつれて日本人の客も増え、口コミで良い評判を貰えるようになりました。海洋酒店の厨房に日本人がいると知られるようになると、日本から直接私に部屋の予約電話が来るようになり、私はパンの指導で来ているにも拘らず営業の仕事まですることになりました。大変ではありましたがそれも自分が関わったホテルの為と思えばそれはそれでよいと思ったものです。その後日本人の団体ツアーが来るようになり、また、義烏市の貿易商の人たちが貿易相手の日本人商人を紹介してきたりととにかく忙しい日々が続きました。

一方楽しいことも多くあり、日本人客とは日本語で親しく話をしたり、仕事がうまく行ったときは客に喜んで貰える嬉しさも格別でした。だんだん義烏市に住んでいる友人ができて自宅に呼んで貰えたりするようになりました。春節の時などはその友人の自宅に集まった多数の人たちと春節を祝い大変楽しい夜を過ごしました。余談ですが、春節を迎える大晦日には各家毎に花火を上げるのですが、自分の家の花火がなくなってしまったのに隣の家がまだ花火を打ち上げていると負けじと花火を買いに走るという競争も面白く、そんな訳で春節を迎える夜の、義烏市の花火の売りに上げは日本円に換算すると2億円とも言われているのだそうです。

義烏市は、中国ではさほど大きな都市ではありませんが、私がホテルで仕事をしていた頃は人口270万といわれ、世界中に中国の商品を輸出していました。日本の100円ショップの製品全部が義烏市から輸出されたといっても過言ではないでしょう。

(続く)

〈日本の太海苔巻と中国のお焼きの教えっこの会〉

太海苔巻講師：山田 賀世 さん 中国のお焼き講師：呉 躍鳳 さん

於：三輪コミュニティセンター、第2・3会議室 2016年4月10日(日)

太海苔巻きの具は干しシイタケ、かんぴょう、高野豆腐の含め煮と卵焼き、茹でホウレンソウにカニかまぼこの六種類。ほとんど山田さんが下ごしらえをしてくださったので、その場ではホウレンソウを茹で卵焼きを焼いたぐらいでした。厚焼き玉子を焼くのはマレーシア、タイ、フランスからの若いみなさんと中国からの呉さんです。箸を上手にを使って卵をまとめていました。

海苔の上にすし飯と大量の具を載せ一気にひと巻きする……箸でしたが、爆発しそう。すし飯や具がはみ出てしまいました。でも、山田さんが半分の海苔で包帯を巻くように手当てする方法を教えたので、形が整いました。メダタシめでたし。

中国のお焼きの材料は小麦粉と油で、実にシンプルでした。お焼きというよりも「中華パイ」とよびたいです。焼きあがると薄い皮が何層も重なり、食感はサクサクほろほろです。餡がなく皮だけのものと白砂糖を餡にしたものと二種類を教えていただきました。呉さんは粉の扱いが鮮やか。刀削麺を伸ばす麵職人のような手さばきでした。

太海苔巻きとお焼きには素晴らしい共通点があります。それは、中に入れるものは自由自在に変えられるということ。太海苔巻きにはチーズ、アボカド、キュウリ、ソーセージ……。お焼きにはあんこ、ネギ、肉……。とんでもないものを入れても案外おいしかったりして、楽しめるかもしれません。

(報告・高橋節子)



今回の活動では、イエリンさんとお母さん、崔貞(黒田真子)さんと崔さんの友人・宣さんの4名の中国の方に、マレーシア、タイ(3名)、フランスの留学生が加わって、国際色のある活動になった。それぞれ、真剣な表情で太海苔巻に挑戦した。



太海苔巻は、切り分けるのもそれなりのコツがある。



中国のお焼きには、粉食文化の知恵が詰まっている



最後は皆でテーブルを囲んで'美味しい会食'

これから、毎号「わんりい」漢詩の会の紹介をしようと思います。今回は初めてですから、先ず「漢詩の会」の紹介をしてみます。その後は、毎月の「漢詩の会」で勉強した詩に関すること、次月勉強する予定の詩に関する案内などスペースに合わせてお知らせしたいと考えています。

「漢詩の会」は毎月1回、日曜日に、原則としてまちだ公民館の学習室で開催しています。講師は、桜美林大学名誉教授で、現在は桜美林孔子学院講師の植田渥雄先生です。あらかじめ作成した資料に添って、毎回一、二編を取り上げ、詩の意味、作者の生涯、作者の生きた時代背景など先生の豊かな知識の中から、さまざまな興味深いお話を伺います。

しかし、この会の目的は、漢詩を中国語で読み、味わってみようというところにあります。一般に「漢詩」の鑑賞は漢文調で読み下す訓読でなされます。高校の漢文の時間に読み下しによる荘重な漢詩が忘れられず、漢詩のファンになったという方も多いようです。訓読の漢詩も、それなりに興味深く、詩吟の会などでみなさん楽しんでいらっしゃる方も多いようです。しかし、漢詩は中国の詩ですから、中国語ではどんな調子だろうと思われたことはありませんか？ とはいえ、中国語で漢詩を聞く機会は、あまり沢山はないようです。

各回、取り上げた漢詩について解説をして頂いた後、先生の素敵な声、正確な発音の中国語で、しかも情感たっぷりの朗読を伺うだけでも嬉しくなります。そのあと一句ずつ発音の指導があり、一人ずつ発音をしてみます。訓読の漢詩に興味のある方は、ご自分の好きな詩が中国語だとどんな雰囲気になるのか味わっていただけると思いますし、中国語を勉強している方には、発音の勉強になります。

例えば、4月17日の漢詩の会で指導頂いた詩経の中の「黍離」と云う詩では、この詩が作られた時代——周の都・鎬京(後の長安、今の西安)が異民族に攻め滅ぼされて、都を雒陽(今の洛陽)に移し、東周が始まった時代——、いわゆる春秋戦国時代の始まりと、周(今までの周=西周)滅亡の原因を作った幽王

と褒姒のお話を伺いました。この詩は、東周の貴族が、昔の都の跡地がキビ畑になってしまっているのを見て、嘆いて詠った詩とのことです。

5月の予定は、詩経と同じように古い、漢代の民謡(楽府)(下記掲載・他)のお話を伺います。楽府とは、漢代に各地の民謡を集めるために設けられた役所の名前ですが、そこで集められた民謡を楽府と呼ぶようになり、更に下っては、民謡の旋律に合わせた替え歌も楽府と呼ぶようになりました。作者が分かっている作品もありますが、多くは素朴な民謡です。5月に取り上げるのは、漢代の「江南」、北朝の「勅勒歌」。若し時間が許せば、西漢・李延年の「佳人歌」のお話を伺います。興味のある方は、どうぞお出かけください。

(有為楠君代 漢詩の会世話人)

jiāng nán
江南
hàn yuè fǔ
汉乐府

jiāng nán kě cǎi lián
江南可采莲

lián yè hé tián tián
莲叶何田田

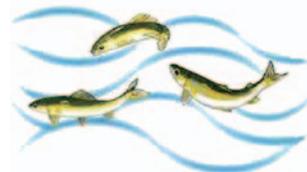
yú xì lián yè jiān
鱼戏莲叶间

yú xì lián yè dōng
鱼戏莲叶东

yú xì lián yè nán
鱼戏莲叶南

yú xì lián yè xī
鱼戏莲叶西

yú xì lián yè běi
鱼戏莲叶北



こうなん
江南

かんがふ
漢楽府

こうなん
江南蓮を採るべし

れんよう でんでん
蓮葉何ぞ田田たる

うお れんよう かん たわむ
魚は蓮葉の間に戯る

魚は蓮葉の東に戯れ

魚は蓮葉の南に戯る

魚は蓮葉の西に戯れ

魚は蓮葉の北に戯る



【映画紹介】

山河ノスタルジア (原題：山河故人)

監督：ジャ・ジャンクー (賈樟柯) / 125分

<http://www.bitters.co.jp/sanga/>

第68回カンヌ国際映画祭コンペティション部門正式出品 / 第63回サンセバスチャン国際映画祭観客賞 / 第52回台湾金馬奨 オリジナル脚本賞・観客賞

以前、‘わんりい’に「何故かジャ・ジャンクーの映画に縁がある」と書いた。ジャ・ジャンクーの映画に呼ばれているようで、何処かで上映があると、上映期間が終わる前に上映を知ってしまうのだ。そんなに頻りに映画を見ている訳ではなし、今、どんな映画が上映されているかなど気に留めたことはないのに、ジャ監督の映画はほとんど見ている。今回も表題映画が「渋谷 Bunkamura ル・シネマ」で上映されるのを直前に知った。

ジャ監督は1970年、山西省汾陽で生まれたそうだから、まだ50歳には程遠い若手の監督である。しかし、ジャ監督は、映画を作るに当たって、常に同時代を生活している人々や社会が、「時」と共にある姿を心を留めているようだ。人も社会も「時の流れ」に抗うことはできないし、「時」と共に変わらざるを得ない。華々しい活劇の場面もドラマチックな人間模様もないが、市井のごく普通の人々と、彼らの生活を淡々と描きながら、なにか心が締め付けられてくるようなしみじみとした情感があってまるで老成した監督の映画のようなのだ。

「山河ノスタルジア」では、1999年、2014年、そして更に2025年の未来へと3つの時代を描く「時」の流れの中で、「人にとって変わらぬ大切なものはなんであろうか」を問う。

1999年、汾陽。二人の青年から思いを寄せられていた女性・タオは、若き実業家のジンシェンと結婚、息子ダオラーを出産する。中国の経済発展の波に乗っているジンシェンは、「パパが米ドルを稼いでやるよ」と、息子にダオラーと名付けた。

2014年、タオは離婚しており、息子ダオラーの将来を考えて親権を父親のジンシェンに譲っていた。そして、タオは父親の突然の死による葬儀で、7歳になったダオラーと再会するが、ダオラーは間もなく父

親と共に海を遠く隔てたオーストラリアに移住することを知った。タオは「帰りたくなったらいつでも帰っておいで」としてダオラーに自分の家の鍵を渡す。

2025年、ダオラーは、母から渡された鍵を首に、オーストラリアで19歳の多感な年齢を生活している。既に中国語は話せず、父親とも心が通わない。自分はいったい何者であろうか。何を求めて生きて行くのであろうか。国際結婚が破綻し、オーストラリアで中国語教師

をしている母親世代の中国人女性にダオラーはかすかな母の記憶を甦らせる。

映画の中で、1999年を生きる青年が「日本の100年掛けた変化が、中国では20年間であった」と言うが、戦前生まれの私には、日本の変化も目まぐるしかった。人と人の関係が窮屈になり、期待した21世紀になってむしろ閉塞感さえ感じる。時が流れ、時代がどんなに進んでも人の心を繋ぐ大切なものがあり、

それが人にとって欠かせないのは中国ばかりではないだろう。

(田井光枝 記)

- Bunkamura ル・シネマで現在上映中
- 川崎市アートセンター・アルテリオ (新百合ヶ丘北口5分) で6月上映予定 <http://kac-cinema.jp/theater/detail.php?id=000911>

‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしく願います。尚、新年度の会費の納入は、4月一杯に願います。また、新入会を歓迎します。

**年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’**

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田市各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

為我井輝忠氏('わんりい' 会員)・講演会

主催：中国を知る会

参加無料

「日本語教育で歴訪したアジア3か国の日本を見る眼」～中国・スリランカ・フィリピンでの仕事を通して～
 現地で付き合い交流した人々を通して感じた、日本への期待とはどのようなものでしょうか。私たちが彼らの期待に
 応えるために何ができるのでしょうか。

場所：町田市民フォーラム 第2学習室 A.B. 日時：2016年5月6日(金) 14:00～15:30

◆問合せと申し込み：床呂 英一 ☎090-1439-4348 E-MAIL: m-tokoro@mta.biglobe.ne.jp

講演会の要旨

【初めに】

1 昨年から、フィリピンで日本語を教えているが、
 現在夏休みを利用して一時帰国している。これまで外
 国での日本語教育に携わってきたのは中国(2年)、ス
 リランカ(1年)そしてフィリピン(1年半)で、合わせ
 て4年半となる。これらの国々では日本語教育が盛ん
 であるが、しかし、それぞれ温度差があるような気が
 する。

【中国での体験】

中国では2か所で日本語を教えた。最初の1年間は、
 東北地方の遼寧省大連で、次の1年間は南の福建省福
 州である。北と南では言葉も食べ物も習慣も違うので、
 戸惑うことも多かったが、文化の違いを知る機会とし
 てよい体験となった。

【スリランカでの体験】

スリランカは私が様々な活動のフィールドとしてい
 る国なので、一番やりがいがあった国である。教えた
 ところはケラニヤ大学で、スリランカでは日本語教育
 の最高機関で、学生の能力も高く、教える側も学ぶこ
 とが多かった。



【現在教えているフィリピンでの日本語教育】

フィリピンと日本は文化面での結びつきが強く、日
 本語を教える点ではやりやすい。ただ、現在教えてい
 るルソン大学では学生は第二外国語として選択して
 いるためそれほど熱心ではない。従って、あまり難し
 いことを教えるより、楽しく、すぐ役に立つような易
 しい日本語を教えるように心がけている。

【結び】

これまでの4年半の外国での仕事と生活は、必ずし
 も快適でやりやすいことばかりではなかったが、振り
 返ってみれば、その国ならではの体験は得難い収穫で
 あった。教えることだけでなく、人と人との交わり、あ
 まり外国人が行かないところへの旅行、文化的な見聞
 等々言い尽くすことが出来ないことを体験している。

◆わんりいの催し ボイストレーニングをして 日本の歌を美しく歌おう!

あなたも私も笑顔が美しくなる! 身体のを抜いて、
 気持ちよく発声しよう!!

▲5月の講座：24日(火) } まちだ中央公民館・視聴覚室
 ▲6月の講座：28日(火) }

▲時間 10:00～11:30

★動きやすい服装でご参加ください

●練習曲：「ひとつの種」

●講師：Emme(歌手)

●会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

●定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)
 E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



◆わんりいの催し 中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音! 中国語のリズムで読んで漢
 詩の素晴らしさを味わおう!!

▲5月の講座：15日(日) ▲6月の講座：12日(日)

▲場所：5月まちだ中央公民館 第7学習室8F
 6月まちだ中央公民館 第3・4学習室7F

▲時間：10:00～11:30

▲講師：植田渥雄先生
 (現桜美林大学孔子学院講師)

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)
 E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)



【予告】 町田国際交流センター・協力部会の催し
講演会 **ひとりで始めた海外支援**

～何もなくても何かはできる～

- **講師：生地 陽** (東京科学少年応援計画代表/町田在住)
2009年よりベトナムとミャンマーでの海外支援をおこなう。
- **町田市民フォーラム3F / 視聴覚室** (定員28名)
- **2016年6月25(土) 14:00～16:00**

海外支援へ一歩踏み出すために必要なことは？ 現地の状況は？ 自身の安全は？ 資金は？ 現在アジアの子供たちの教育支援を行っている生地陽さんから、海外ボランティア活動の注意点や必要なこと、そのやり甲斐などを、映像を交えながらお話しして頂きます。



- ◆ **問合せ：☎042-722-4260**
町田国際交流センター
- ◆ **申込み：名前/住所/☎/参加者数を書いて下記へ**
FAX:042-722-5330 町田国際交流センター
E-mail:info@machida-kokusai.jp

秩父山西省友好記念館・神怡館の催し
秩父の手仕事「笹かご展」

おかめ笹を使って作る笹かご。秩父地方では昔から使われてきた日用品です。作りたては鮮やかな緑色ですが、やがて肌色になり、50年も経てば味のある銚色になっていきます。今年作られたものから100年前のものまで、約50点を展示しています。

- **埼玉県山西省友好記念館・神怡館** <http://www.shenyi.jp/>
秩父郡小鹿野町両神薄 2245 ◆ **問合せ：☎0494-79-1493**
- **2016年5月29日(日)まで**
- **9:00～17:00** (休館日は毎週火曜日と5月6日金曜日)
- **入館料：一般200円、小中学生120円**



← 100年経つ笹かご

第11回「弦之縁」

姜小青フレンドリーコンサート

<http://jiang-xiaoqing.xii.jp/schedule/t20160617.html>

三面の琴が出会うとき新たな世界が広がる

- 出演：**姜小青** (古箏) 徐恵綺 (台湾古箏)
チョウジャブ、ミヤガマルスレン (ヤタガ・モンゴル箏)
- **2016年6月17日(金) 19:00開演** (開場：18:30)
 - **めぐろパーシモンホール・小ホール**
<http://www.persimmon.or.jp/>
(東京都目黒区八雲1-1-1)

- **参加費：4,000円 全席自由**
- ◆ **問合せ&申込：☎080-1304-7347 (村山)**

E-MAIL: xianzhiyuan_hz@ybb.ne.jp

- **主催：姜小青フレンドリーコンサート実行委員会**



ウリウサ
烏里烏沙氏 (山岳・高山植物写真家) による講演会
世界自然遺産 三江併流地域に生きる

- **練馬区役所 本庁 20F・交流会場** (定員60名)
- **2016年5月15日(日) 17:20～18:50**
- **参加費：1,000円** (当日徴収、当会会員・学生無料)
- ◆ **問合せ&予約** (予約受付：5月11日/水迄)
☎03-5912-1232 FAX:03-5912-1233
e-mail:wusa@gesanmedo.or.jp

※講演会のあと、パーティーを予定

三江併流地域とは中国雲南省北部のデチエン族自治州及び怒江リ族自治州あたりを指す。この地域はインド亜大陸とユーラシア大陸の衝突によって生まれた巨大な褶曲山脈(横断山脈)が南北に走り、その山脈を切り裂くようにチベット高原から流れ下る三つの大河である怒江(サルウィン川上流部)、瀾滄江(メコン川上流部)、金沙江(長江上流部)が西から順に並び、南北方向に深い峡谷を刻んでいる。さらにその西側には独龍江(エーヤワディ川源流部)が流れ、ミャンマーの中央部に下っていく。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。



リュウウエイ 来日30周年記念 ～劉薇後援会15周年記念

劉薇ヴァイオリンリサイタル2016 ピアノ・椎野伸一

劉薇オフィシャルHP：<http://liuwei-musics.com/music/index.html>

紀尾井ホール(東京都千代田区紀尾井町6-5) **2016年5月28日(土) 14:00開演**

- **参加費：一般5,000円 学生：3,500円**

【曲目】●馬 思聰(1912～1987)、春天舞曲(1952)、山歌(1952)、牧歌(1944)/Pastoral
●助川敏弥(1930～2015)、日傘をさした女(2011年作曲世界初演、作曲家を偲んで)
●スメタナ(1824～1884)わが祖国より、●ベートーヴェン(1770～1827)ヴァイオリンソナタ第9番

- ◆ **問合せ&申込：☎080-5460-8710(崔貞) E-MAIL:jane_syjp@yahoo.co.jp**

主催：エム・バイ・ミュージクス 共催：劉薇後援会

麻生市民館利用団体による **あさおサークル祭2016** **参加無料**

● 2016年5月28日(土)・29日(日) ● 会場：川崎市麻生市民館(小田急線新百合ヶ丘北口3分)
<http://www.city.kawasaki.jp/asao/category/112-11-1-0-0-0-0-0-0.html>

【'わんりい' 参加のプログラム】

▲5月28日(土)大会議室 15:30~16:30

山下孝之らによる「ケーナ(アンデスの民族楽器)演奏会」



どこか懐かしく、どこか心なごむケーナの音色を生かした、日本的味わいのある山下孝之さん創作曲など多数!

▲5月29日(日)視聴覚室 10:30~12:00

講演「現代に生きる孔子の言葉

『論語』から平和を考える」

講師：植田渥雄(桜美林大学名誉教授)

▲5月29日(日)視聴覚室 13:30~15:00

「ボイス・トレをして日本の歌を美しく歌おう!」

ボイス・トレって? 動きやすい服装でご参加ください。

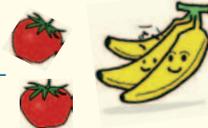
講師：EMME(エメ)(歌手)

'わんりい' 料理の会 **誰でもできる彩り華やかなキャラクター弁当を作ってみよう!!**

叶霖(イエリン)さんと一緒に作る楽しいお弁当 まちだ中央公民館6F・料理室

2016年5月17日(火) 11:00~14:00

- ※お弁当を彩る素材の変身術を身につけよう!
- ※男の子用・女の子用のお弁当を実際に詰めてお土産にします
- ※お弁当向きのおかず2種類を試食。スープ、サラダ付き



- 参加会費：1,500円(講師謝礼 材料費 お土産用の弁当箱代 昼食代) ※留学生は無料
- 募集人数：15名(最多20名) ● 持ち物：エプロン、筆記用具
- ◆ 申込みと問合せ：☎042-734-5100 'わんりい' E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

初心者のための水墨画教室

【鶴川水墨画教室】
体験のお誘い



生徒のレベルと個性に応じた適切な指導を体験してみませんか。季節に応じて身近な風物を描ける楽しさを味わえます。

- 講師：満柏(日中水墨協会会長)
- 場所：和光大学ポプリホール・鶴川
小田急線鶴川駅北口より徒歩3分
<http://www.m-shimin-hall.jp/tsurukawa/>
- 曜日・時間：毎月第2、第4(月)14:00~16:00
- 体験参加費：1000円、見学：無料
- 問合せ：野島 ☎042-735-6135

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞いた面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又'わんりい'の活動についてのご希望やご意見及び'わんりい'に掲載の記事などについても、簡単なお感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

'わんりい' 213号の主な目次

北京雑感(103)牡丹	2
論語断片(16)君子の徳は風なり <small>かぜ</small>	3
媛媛讲故事(84)「蛇の恩返し」	4
諺・慣用句(49)「見掛け倒し」	6
四姑娘山写真だより(36)春まもなく	7
元寇と鷹島(7)	8
混迷の時代を開くザメンホフの人類主義Ⅲ	10
【トピックス】果敢二胡リサイタル	12
中国の笑い話27	13
東西文明の比較(4)	14
スリランカ紀行⑧「私の中のセイロンティー」	16
中国・義烏でパン作りの指導をするⅡ	18
活動報告「日本の太海苔巻と中国のお焼きの会」	19
「漢詩の会」たより①「漢詩の会紹介」	20
映画紹介「山河ノスタルジア」	21
'わんりい' 掲示板	22~24

2016年5月定例会/6月号おたより発送日と場所

- ◆ 場所：三輪センター・第三会議室
- ◆ 5月定例会:5月10日(火)13:30~
- ◆ 6月号のおたより発送日:6月30日(月)10:30~
- ★ おたより発送日は、お弁当をご持参ください
- 問合せ：☎042-734-5100